

橘純一による「源氏物語」批判

——削除を要求された小学校国語科教材——

有働 裕
(国語教室)

Junichi Tachibana's Objection against Tale of Genji ——A Teaching Material Requested to be Deleted from Elementary School Japanese Curriculum——

Yutaka UDOU
(Department of Japanese Studies)

一、はじめに——古典を「教える」ということ——

◇「七生報国」

教員を対象としたある研究集会のことである。私自身が高等学校の国語科教諭であったころのことなので、もう十年余り昔になるが、その集会に助言者として招かれていた大学教授の発言が、強く印象に残っている。古典文学教材を用いた実践報告がなされた後に、彼は次のような趣旨の感想を述べた。

現在教科書に採用されている古典文学教材に、その読者である若者の精神をゆさぶるような文章がどれほどあるだろうか。どうも、妙に老人好みのものが多いように思われる。かつての(戦前の)教材には、例えば『太平記』のように、「七生報国」の語が特攻隊機の機内にまで張られるといった形で、若者の精神に深く根を下ろしたものがあつた。今日の古典文学教材にそれだけのものは見当たらないように思われ、残念である。

一言でいえば、時代錯誤の懷古趣味ということになるのか。当時も今も、このような古典文学への「愛着」を、私は肯定する気になれない。しかし、この発言がいまだに印象に残っているのは、この発言に腹を立てたからではない。

この助言者は、実は私が大学時代に教えるをうけたことのある教授であつた。戦時下の体験をよく講義中にも語る方であつたが、その場合の多くは戦争への憎悪・嫌悪を伴うもので、二度とあのことがあってはならない、という文脈の中においてなされていた。また、彼自身、戦後の教育の民主化にかかわる運動に、極めて熱心に取り組んでいた時期があつたとも聞いている。それだけに、先の発言が彼の口から発せられたことは、大変意外に感じられた。

『太平記』巻十六、湊川の合戦において足利尊氏の大军に敗れ、もはや死を覚悟した楠正成は、弟の正季に最後の望みを尋ねる。それに対して正季は、七度人間に生れて、朝敵を滅ぼしたいと答え、正成を喜ばせた。この場面が、戦前の中学校教科書において教材化されている。

楠木が一族十三人、手の者六十余人、六間の客殿に二行に並み居て、念仏十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切りたりける。正成座上に居つつ、舍弟の正季に向ひて、「抑々最後の一念に由つて、善悪の生を引くといへり。九界の間に何か御辺の願なる。」と問ひければ、正季からからと打笑ひて、「七生まで只同じ人間に生れて、朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候へ。」と申しければ、正成世に嬉しげなる気色にて、「罪業深き悪念なれども、我もかやうに思ふなり。いざさらば、同じく生を替へてこの本懐を達せむ。」と契りて、兄弟共に刺違へて、同じ枕に伏しにけり。(佐々政一編『新撰国語読本(昭和一版)』巻八「五 太平記(三、湊川の戦)」明治書院・昭和二年)

そして、この正成・正季の思いは、そのまま太平洋戦争末期の特攻隊員の、一つの心情の型として定着していくこととなったのである。国民学校期には、六年生の教科書にまで、この場面をやさしく書き直したものが登場する(『初等科国語』巻八「十二 菊水の流れ(湊川の戦い)」)。

特攻隊員にとって、「太平記」という古典による教育は、いったいどのような意義を持っていたのだろうか。自らの命を賭けた攻撃が、おそらくは犬死に終わるであろうことを感知しつつ、もはやそれを拒否できない状況の中で、狂い出さんばかりの恐怖心を押さえ付ける役割を「七生報国」の語は果たしたのだろうか。あるいは、何の迷いもなく、死んだ後も自らの霊が米兵を苦しめることを確信していたのだろうか。いずれにせよ、そのような形で本心に若者の精神に根を下ろしていたな

らば、それは、国語科教育、古典文学教育の恐ろしいほどの「効果」であった。

このような教育のあり方が、戦後数十年を経た後も、何のためらいもなく、「古きよき時代」のものとして語られていたのである。

◇古典文学への「愛着」のゆくえ

戦後の国語科教材の民主化は、大幅な古典の削減をひとつの柱となされた。古典こそが、偏狭な国粹主義の温床であり、伝統文化の絶対視は民主主義の定着を阻むと考えられたのである。

その後も、今日に至るまで、小中高の国語教科書における古典文学教材は漸減を続けて来た。現状は、完全に消し去ることへの後ろめたさから、いくらかは残されているという程度のものであろう。かつては、戦前のものとは一線を画した、新しい古典文学教育のありかたが論議されたこともあったが、近年はこれといった論議もない。研究集会等での発表や雑誌等の実践報告にしても、目立つのは入門期の工夫に関するものである。本質を論じ、新たな意義を問うような傾向は乏しい。つまり、依然として古典文学の教育は、「伝統的」な表現とイデオロギーとを無批判に受け入れるだけの、主体性の乏しい学習活動しか生み出し得ていない、というのが実態ではないだろうか。

日常生活はもとより、学校教育の場においても、古典文学はしだいに縁遠いものになりつつある。一方で、指導要領等では伝統文化に対する関心・理解が強調されているが、社会の目まぐるしい変貌への適応を求める「情報化」「国際化」教育等の奔流の前において、ほとんど無視されているといつてよい。先のような、戦前の教育・教材に対するノスタルジックな発言は、いわばそのような現状への警鐘として善意に解すればよい、という見方もある。確かに、私のように古典文学研究と国語科教育の両方の講義を大学で担当している者としては、正直なところ、現状にはある種の危惧を抱かずにはいられない。しかしながら、戦前の国語教育あるいは古典文学教材への郷愁に同調するつもりは、私には全くない。

それにしても、古典文学への憧憬や愛着といったものは、つまるところ「七生報国」的な自己陶醉へ行き着くほかはないものなのだろうか。そうとばかりは言い切れないはずである。近現代の文学と同様に、多様な読みの可能性を内包するものと思いたい。先のような発想が強固に生き続けているのも、そもそも教室において古典文学を読むということの意味が、戦時下の教育についての反省をふまえて、本当に問い直されることがなかったからではないのか。必要なのは、戦前の国語教育への郷愁などとは異質な、新しい意義づけである。先の「七生報国」に代表され

るような形でしか古典文学教育への「主体的な」取り組みがあり得ないのならば、そんなものは早々に消滅した方がよい。

もちろん、先にも触れたように、戦後の一時期には、荒木繁氏の高専学校での『万葉集』の実践のように、受動的な鑑賞指導にとどまらない「問題意識喚起」を目指した試みもあった（『民族教育としての古典教育』『日本文学』一九五三年十一月）。しかし、防人の歌に抵抗の姿勢を見出し、祖国に対する愛情と民族的自覚に目覚めるといふ読みの方向性は、どこか戦前の定式化された主情的な読み方——『七生報国』的な悲壮感への陶醉——と同質のものを感ぜさせもする。そしてこの問題をめぐって一時期盛んになされた論争も、十分な止揚を見ないうちに終結してしまっ

た。必要とされているのは、教材の内容・テーマの問題にとどまらない、「読み」そのものの質的な転換である。他の教材分野の読解指導では旧聞に属することであるにもかかわらず、この問題についての論争が、古典文学教材に関しては、いまだにほとんど取り上げられていない。

◇新たな意義づけを求めて

古典文学を読むという行為が示す方向性は、没個性的な国家意識や独善的な民族意識への同調に向かうものばかりではないはずである。T・イーグルトンの言うように、文学というものがそもそも「宗教が投げ出したイデオロギー的任務を代行して完遂するの」に「好都合なものであり、その教育が国民としての「自負心」の普及や「道徳的」価値の伝達を主たる任務とするのであれば（大橋洋一訳『文学とは何か』一九八五年・岩波書店）、古典文学の教育などは、まさに思想統制のための施策そのものであるということになる。そして、おおむね事実としてそうであったと歴史上認められることも確かである。だが、それでもなお、現代の唯一無二の「個」である読者と、歴史上の過去においてただ一度現れて消えていった「個」である作者とが、作品を通して対話する——そのような形で「読み」の確立の可能性を、研究においても教育においても、追究してみたいと私は考えている。

そのための基礎作業としても、先に示したような、戦時下の古典文学教育が行った罪科を詳細に調査する必要があるように思われる。当時の古典文学もしくは古典文学教育のとらえ方には、どのような本質的な誤りがあったのか。本来古典文学を読むという行為は、民主的な社会の建設に対しては後ろ向きの行為でしかないのか。そういった問題を十分に追究せず、古典文学を「読む」ことの新たな意義付けを検討して来なかったこと——それが、今日の古典文学教育そのもののへの、関心の低さ

の原因となっているように思われる。

いささか長すぎる前置きとなったが、戦前の古典文学教材観を考える上で、大変象徴的な事件が昭和十三年に起きている。橋純一という国文学者が、『国語解釈』誌上で行った、小学校の国定教科書教材「源氏物語」批判である。彼の批判は、何を意図したものであり、どのような背景があったのか。この解明が本稿の課題である。

批判された側の教科書および教科書編集者にどのような問題があり、橋氏の発言にどのように反応したのか。また、結果的にこの教材そのものはどのような役割を果たしたのか。この事件を、国語科教育史のなかにどのように位置付ければよいのか等も、明らかにする必要があることはいうまでもない。しかしながら、現段階では調査不足であり、与えられた紙数を越える課題でもある。これらについては別稿で扱い、併せて、そこから今日の古典文学教育についてのどのような教訓・提言を引き出すことができるのかを、改めて考えてみるつもりである。

二、橋純一の「源氏物語」批判

◇小学校教材「源氏物語」

国定教科書としては第四期にあたる『小学国語読本』巻十一（昭和十三年度以降使用）に、「源氏物語」という教材が収められている。その内容は、紫式部についての解説と、『源氏物語』中の二場面の現代語訳とからなっている。

解説の部分は、紫式部が幼少期から大変聡明な少女であったこと、『源氏物語』が世界的に優れた文学作品であることを主に述べたもので、『紫式部日記』の記述によったと思われる部分が少なくない。また、現代語訳は「若紫」「末摘花」の一部分である。「若紫」は、光源氏が北山で紫の上を垣間見る場面。「末摘花」は、光源氏が自分の鼻に赤い絵の具をつけて紫の上をからかう場面である。

ただし、口語訳というものの、教授上の配慮からかなりの意図的な改編がなされている。たとえば「若紫」では、視点人物である光源氏の心情を述べた部分はすべて省略され、平安時代の一少女を描いた、平易な描写の文章となっている。光源氏の関心の根底にあるものが、継母への屈折した恋愛感情であることを考えれば、当然の改竄と言えなくもない。

この教材を掲載した意図について、『小学国語読本尋常科用巻十一編纂趣意書』（昭和十三年）は、「いはば我が文学の最高峰たる源氏物語の面影をみせようとする」と記している。ただし、小学生を対象とした教材であることを配慮して、次

のように付言している。

固より爛熟し切った当時の世相のよく現れてゐる源氏物語だけに、これを教材化することは至難の事に属する。従つてそこに編纂上大なる考慮が払はれてゐることに先づ注意せねばならない。

『源氏物語』そのものが持つ「危険性」を、完全に消し去った教材化は、はたして成功したのか。あるいはまた、そこまでして教材化する意義があったのかどうか。橋の批判はそれらの点に向けられることとなる。

◇削除要求の開始

橋純一による、国語読本教材「源氏物語」への批判は、昭和十三年六月の『国語解釈』第二十九号に掲載された、「小学校国語読本巻十一「源氏物語」の削除を要求する」に始まる。橋がどのような学者であったかは後述することとし、まずは批判の内容を見てみたい。

橋は、この教材の原文との関連について、文部省図書監修官の井上超が「よし参考」に原文を見るにしても、この編纂上大なる顧慮を破壊するような指導では、折角の教材が価値を失ふことになる」（『国語教育学会編「小学国語読本総合研究」巻十一』）と記していることを引いて、次のように主張する。

監修官の言はれるとほり、原作には触れぬといふ条件を守るとしても、「編纂上大なる顧慮」の払はれてゐるといふ本教材そのものが、平安朝貴族の類廃した日常生活を如実に語るものではあるまいか。（中略）源氏の気持ちは、やはり一種の恋愛遊戯なのであつて、さういつた類廃した感情はかなり濃厚にこの一文の上にも現はれてをり、何ともいへぬいやなものを感ぜしめる。そのいやなものは即ち平安朝の貴族文化を衰亡に導いた文化毒素の放散する艶冶の妖気である。今私は源氏物語が文芸としてすぐれたものかどうかを問題にしてゐるのではない。小学教育の上に源氏物語が進出して来たことを、教育上の見地から問題にしてゐるのである。仮に数歩を譲つて、本教材面だけを問題にするとも、私は文部省に對し、嚴にその削除を要求する。

その後「天下の父兄各位はどう思はれますか。葉書を以て左記宛所感をお寄せくださるならば幸甚です。」と記され、編集部の住所が記されている。

◇批判の根拠

先の「源氏物語」の削除を要求する」では、「今私は源氏物語が文芸としてすぐれたものかどうかを問題にしてゐるのではない。小学教育の上に源氏物語が進出し

て来たことを、教育上の見地から問題にしてゐるのである。」とあり、批判はあくまで教材に向けられたものであって、『源氏物語』そのものの評価とは区別されているように読み取れる。また、そのような態度は、本居宣長の訓詁学の復興を提唱していた橋としては穏当なものであった。しかし、それは『源氏物語』という作品に伴う一種の権威やその方面の研究者・愛読者へのいささかの遠慮にすぎなかったといえよう。橋の本音としては、当初から『源氏物語』そのものの価値を問題にしたかったようであり、この二十九号の編集後記において既に、『源氏物語』は文学として美であるかもしれない。しかし、人生批評として不健全であることはたしかである」と記している。

続く三十号（昭和十三年七月）は「小学国語読本巻十一「源氏物語」排除特輯」となり、教材の全文の掲載、橋の「源氏物語は大不敬の書である」「小学国語読本巻十一「源氏物語」について文部省の自省を懇請する」「不敬の書源氏物語抄訳（その一）」という三つの文章と、読者からの「反響録」のみの内容である。ここにおいて、単に教材としての適不適の問題を超えて、『源氏物語』そのものを批判しようとする態度が前面に出て来ることとなった。「小学国語読本巻十一「源氏物語」について文部省の自省を懇請する」の中の次の文章は、そのことを明確に示している。

源氏物語の情的葛藤中、最も重要な枢軸をなす藤壺中宮対源氏の君の關係、これより起つた第三帝（桐壺の巻に出で給ふ帝を第一帝として数へ申す）御即位の事、源氏の君が太上天皇に准ぜられる事、これらは大不敬の構想である。源氏の君の須磨引退の原因となつた第二帝の寵姫臘月夜内待との關係も亦然り。

源氏物語は全編一貫して、その性格が淫靡であり不健全である。平安朝貴族衰亡の素因を露呈した文学である。これを無条件で、「我が国第一の小説」「世界の文学」として推奨することは、国民教育上有害である。

そもそも、本居宣長の学問に傾倒しているのであれば、宣長によって「ことにすぐれてめでたきものにして、大かたさきにも後にも、たぐひなし」（『源氏物語玉の小櫛』）と評された『源氏物語』を、ここまで否定するのは奇妙でさえある。当時のおもだった国文学研究者がとった態度とは大きな開きがあり、批判も少なからず寄せられることとなった。だが、この文章の中では、「むしろ、本物語の価値は、宣長翁の「物のあはれ」論の系統から離れて、新しく再検討に附せらるべきものと信じてゐる」と態度を硬化させている。

三、橋純一と雑誌『国語解釈』

◇橋家当主純一

橋純一は明治十七年に東京京橋区木挽町に児島喜三郎の五男として生まれる。府立一中、二高（仙台）を経て東京帝国大学に入学し、本所区小泉町の橋家の養嗣子となったのは、明治四三年二五歳の時で、同年七月まで国文科に在籍していた。

この橋家は、幕末の国学者橋守部の直系で、純一は守部以来四代目の当主となったことになる。児島家は元来橋家とかかわりがあり、橋守部も「入瀨子の懇望」によっての入籍であったという。国学者の中でも独自の傾向を持つ守部の後裔となったことは、純一のその後の生き方を決定づけたといってもよいかもしれない。

以後、東京帝国大学助手、府立第五中学教諭を歴任し、大正九年から十一年にかけて『橋守部全集』を国書刊行会から刊行する。大正十四年（四十一歳）から十六年間著述生活に入り、その間、二松学舎専門学校、立正大学などで講師を務める。昭和十六年（五十七歳）からは陸軍士官学校の国漢科教官となる。

終戦後、同校の閉鎖により自然退官。昭和二五年に跡見短期大学教授となり、昭和二十九年一月に七十歳で没している（『国語と国文学』昭和二十九年四月の関根俊雄編「橋純一教授略年譜・主要著作目録」による）。

学問的な業績としては、先の『橋守部全集』の刊行のほか、「大鏡」「徒然草」についての注釈・研究が、それぞれの研究史上の重要な位置を占めている。また、日本神話についての独自の見解でも知られている。

◇『国語解釈』の創刊

橋純一氏が「源氏物語」批判を展開した研究誌、『国語解釈』とは、そもそもどのような性格のものであったのか。そして、そこに橋純一はどのような形でかかわっていたのか。

『国語解釈』は昭和十一年二月に創刊号が出され、昭和十五年五月号刊行後に休刊となる。当初は神田区金沢町の瑞穂書院から出されていたが、昭和十四年十二月号以降は、同院を橋氏が引き取った形で、氏の自宅のある大森区久が原に移っている。現在、教育出版センター刊の復刻版（昭和五六年）によって、全五二冊を容易に見ることが出来る。

昭和十一年二月の『国語解釈』創刊号には、「国語解釈学会」による「発刊の辞」が巻頭に掲げられている。そこでは、現在の国語国文学研究に対する不満として、

「指導精神の微弱なこと」と「訓詁の学が軽視されていること」との二つがあげられている。国語や国文学から日本民族における指導精神を抽出することこそが研究者の使命である。そして、それを実現するための方法は、本居宣長によって大成された国文学の学問的方法である、古典の訓詁をおいてはない——それゆえに、「国語解釈学会」を創設し、国体明徴・日本民族精神の確認に向って訓詁の一路を進まうと誓って、機関誌として本誌を発行したのであった。

国語国文学という多様な性格を内包する分野を対象としながら、その目的と方法とが極めて狭く限定されていることがまず注目される。この点は、同年三月号（第二号）の裏表紙見返しに載せられた「国語解釈学会々則」からも確認できる。

第二条 本会ハ国語及ビ国文学ノ研究殊ニソノ訓詁ノ学ノ興隆ニ努メ以テ国体ノ明徴日本民族精神ノ宣揚ヲ期スルト共ニ国語尊重ノ社会的風潮ヲ盛ンナラシムルヲ目的トス

この会則には昭和十年十一月三十日の日付があり、同日に国語解釈学会が創設されたことがわかる。文部省が天皇機関問題とのかかわりで「国体明徴」訓令したのは同年の四月一〇日のことであり、七月十八日には、大学・専門学校長、生徒主事を対象とした憲法講習会が開かれている。国語解釈学会の設立は、このような文部省の動きに直接影響されたものと考えることができる。

◇「国語解釈」における橋純一的位置

このように、国体明徴運動に呼応して創刊された「国語解釈」ではあったが、創刊号の内容を見るかぎり、いわゆる時局的な色彩で埋めつくされているというわけではない。

国木田独歩とワーズワースの関連を軸とした塩田良平の「独歩の「春の鳥」鑑賞」、「下級国民の下劣な言語と軽蔑」されている江戸語の用法を実証的に説明しようとする山崎麓の「江戸語雑記」等、「国体明徴・日本民族精神の確認」とは直結しない論稿も含まれている。その中で「発刊の辞」に掲げられた目的に見事に合致しているのが、巻頭論文である橋純一の「天つ日つぎしろしめす」である。というより、両者を読み比べれば、「発刊の辞」がほとんど橋個人の手によってなったことが明らかにになる。

この論文は、本居宣長の『古事記伝』を引きつつ、統治権を有するという意に通常理解されている「天つ日つぎしろしめす」という語は、本来は「高天原以来伝統の稲穀を召しあがる」ことを指し示すものであると指摘する。そして橋は、宣長の考察によって、天皇が農業神であり「我が皇国」も農業国家であることが明らかに

されたとし、これは「実に心も言葉も及ばぬ名解であり、我が国体の精華を知る上に於て、何人も熟読玩味すべきものである」とを強調する。宣長の説を平易に解説することを目的とした文章で、厳密には論文とはいえないが、気になるのは、この説自体が「国体明徴」に資すると自らの確信を繰り返して述べる、異常なほどに興奮した筆致である。後の「源氏物語」批判の宣言等にも通じる、特有の文体で書かれている。

それにしても目立つのは、橋の執筆した文章の多さである。創刊号の目次では三つであるが、実際にはもっと多い。例えば、「閑下猊下等の敬称を廃すべし」「パパ・ママの問題はどうなった」の二つのコラムは、末尾のJ・Tのイニシャルやその内容・文体から考えて橋の書いたものと見てよいだろう。その他、「発刊の辞」以外にも、無署名のもので彼の書いたものがあるはずである。

この傾向は、「国語解釈」全体を通して言えることでもある。復刻版の付録の「総索引」によって確認すれば、創刊・終刊号五二冊の中の橋の執筆回数は二二四にも達する。それ以外の、「編輯部」と記されているものや無署名の埋め草記事の中にも、橋の筆によるものが少なくないはずである。他の執筆者で多い方が山崎麓の二五、慶野正次の二三であるから、異様と言ってもよい。つまるところ、本誌は橋純一の個人雑誌的な傾向が強かったということになるが、それにしても恐ろしいほどの意気込みである。

四、教育現場とのかかわり

◇「国語解釈」の読者

ところで、この雑誌はどのような読者層を対象として刊行されていたのか。研究者をはじめとする幅広い国語国文学関係者がその対象であったことは当然だが、まず第一に中学校の国語教員が考えられていたようである。そのことは、昭和十一年六月号以降に掲載されている「入会のおすゝめ」に、「本誌は訓詁の新学風を興こすことによって、国体の明徴、日本民族精神の宣揚を期するものであります。まづ中等学校国語教科を中心目標とし、その解釈方面に堅実な研究の歩を進めて行く方針であります。」と明確に示されている。

だが、小学校の教員も購読者中にならいたものと思われる。同年三月号の「会員のお言葉抄録」の中には、他に、「文検受験者にも実によい会が出来たこと仕合せと存じます。小学校教員諸君の中に文検受験者がありますから」（田中健三）「発刊の辞を拝読致し、小学校読方教育にたづさはる者として深く感激を覚えしました。」

(山口角鷹)といったものが見られ、教育実践にかかわる者を中心とした、かなり幅広い購読者層があったことがうかがえる。その中には、次に引用した岡本清男のように、橘純一の主張を手放しで賛美するものもあった。

国体明徴、日本精神発揚の声高き折柄まことに時宜に適した御企てであり、又国語国文のかくあらねばならない根本的の指針を御示し下さる先生の国語愛国文愛、延いては国家愛のほとばしりと、この御企てを拝察致し心から喜び且つ賛意を表する次第でございます。これにより国語教育界乃至は国語教育人は自ら深く反省し、その本来の姿に立ちかへつて、着実健康真摯なる教育に進み以て健全なる国民性がその間に磨き上げられる事を思ひ会心の微笑を禁じ得ません

このような読者層に支えられた雑誌であったことが、まさに「訓詁の新风」を旨とする学術雑誌でありながら、小中学校の現場での教育実践にも積極的に言及しようとする姿勢を生み出していくこととなる。やがてはそれが、昭和十三年六月の「小学校国語読本巻十一」「源氏物語」の削除を要求する「へとつながるのであった。

◇橘純一教育観

小中学校の教育実践への積極的関与という傾向が最初に明確に現れたのは、昭和十一年五月号(第四号)の巻頭言であった。

小中学校の国語科に於ける実用教育と、情操教育との二方面、そのいづれが重い。吾人は前者を重しとす。

正確に「読み書き」出来るやうに生徒を仕立てる事は、口うつしにし、手をとるやうにして始めてなし得ることで、国語科を措いては、殆ど絶対に望み得られない。(中略)かくいふは、利害の打算のみからではない。民族的情操として重要な国語尊重の気風も、畢竟この「読み書き」を正しくすることに於て具現せられるのであつて、実用方面の重視は、国語科使命の真摯厳肅なる自覚から当然発せらるべき教育信条である。

以下展開されるのは、前時代の流行であった情操重視の文学教育論の否定であり、訓詁の学を根底に据えた「実用教育」によってこそ「民族的情操」は養われるとする主張である。これは、戦時下盛んにもてはやされた「行的教育」「錬成教育」の発想である。

たとえば、昭和十六年四月の教育雑誌『日本教育』(国民教育図書)創刊号には、文部省初等教育課の次のような見解が掲載されている。

かくの如く見る時に初等普通教育は初等であるとは雖も、実に国家的に見て頗

る重要なものと言はねばならない。国家発展の基礎の一つはこゝに存すると言つても過言ではない。然して其の完全なる実現方途は、基礎的知識技能、及び情操の錬成、習練に在るのである。錬成とは錬磨育成である。反復練習である。国民として生きて働く、実行への進み得る知識技能の習得と、それが地盤をなす国民的情操の涵養とである。(『国民学校教育相談』)

橘の主張は、このような国民学校期の教育思潮を先取りするものであったといえよう。国体明徴運動に即座に対応して学会を創設し、文部省の方針を先取りする、まさに時流迎合型の学者・文化人の典型のようにも見えてくる。だが、橘には、ただそれだけに終わらないもう一つの側面があった。

五、「源氏物語」の小学教育越境

◇「文芸春秋」への執筆

橘純一は昭和十三年十月、雑誌『文芸春秋』に「源氏物語の小学教育越境」という文章を掲載する。基本的な見解は先の『国語解釈』におけるものと大差はない。とはいふものの、自らが主催する会の機関誌と一流の商業雑誌とは、当然のことながら書き方が異なってくる。感情をむき出しにした表現は控えられ、その筆致には冷静さが感じられる。

たとえば、その書き出しにしても、十二巻の新しい小学国語読本全体を「画期的大改革」として評価するところから始めている。さらに、日本文化を知らしめようとした文部省の方針に敬意を表し、「実に純日本的な読本といふ感じがする。これはまことにけつこうなことに相違ない。」と誉めあげている。

そのような執筆態度もあって、若干ではあるが、新たな考えも示されている。『国語解釈』誌で一時に感情を爆発させた後、自分なりに考え方を整理し、公的な見解としてまとめあげた結論としてとらえてよいだろう。

その中に見られる新しさの一つは、単に教材「源氏物語」のみを批判するのではなく、小学国語読本の方針を評価した上で、それにふさわしくないものがいくつか選択されているとし、その中の一つとして扱っている点にある。

橘が示した他の教材は巻十一の「皇国の姿」というものであるが、批判はその詩の内容が「まさに古事記の説によつたもので、現今の国民信仰とは一致しにくい形」であることに向けられている。その原因を、「失礼ながら編集官が古事記の説、言ひかへると本居宣長翁の古事記伝の説を鵜呑みにして、よく消化してをられない結果だと想像される」と橘は述べている。ここに、一連の橘の主張の背後にあるもの

が露呈しているのだが、この点については後述する。

◇橋の教材分析

『国語解釈』においては、教材文よりも『源氏物語』に対する感情的な批判に終始していた橋が、丁寧に教材本文に言及している点も興味深い。

まず、紫式部についての解説の部分では、式部のことを「彼女」と呼び、我が国第一の「物語」と書くべきところをあえて「小説」と記している等の、表現上の問題に言及している。橋は、これを、現在の非常時意識に反する、前時代のハイカラな意識の残存としてとらえ、編集者の態度を無反省なものとして批判している。

次に、「若紫」を訳した部分についてであるが、これについては、「何といふかはいらしい子であらう」「何といふよい髪でせう」等、紫の上の容貌の美しさを讃えた表現が頻出していることを指摘し、これらは、もはや子供が子供を見ての感情ではなく、大人の世界の感情に入っている、と批判している。つまり、編纂者の苦心にもかかわらず、原文の持つ光源氏の感情が、やはり露呈してしまっている、というのである。

かういふ容貌美の公然たる賛美は、普通の道徳の上で、人間の本質的なものと見られてゐるもの、即ち徳性・能力といふやうなものに対する軽視を伴い易い。実際平安朝の貴族生活では、かういふ人間の本質的なものはあまり必要でなく、重視せられなかったからこそ、このような官能耽美主義の風潮がその社会を支配したのである。この傾向が、たいして修正もされずに国民教育の上に復活されて来たといふ意味でこの教材を見ると、それだけでもかなり問題になるかと思ふ。

橋の道徳観・教育観をもってしては、このような文章が小学校教材として許せるはずはなかった。

だが、それ以上の辛辣な批判が、「末摘花」を訳した部分に對してなされている。まず、橋はこの場面になって突然「紫の君」「源氏の君」という呼称が使用されていることを指摘する。生徒にとって全く未知のこれらの人物について、教師が説明する立場にたされたとしたらどうなるか。正直に源氏が紫の上を引き取ったいきさつを語ろうとすれば、当然、源氏にとっては継母である藤壺の宮への恋慕の情を説明せざるを得なくなる。それをさげやうとすれば、不本意ながらごまかしの説明をするほかはない。いずれにせよ不都合があることは間違いなことである、と指摘している。

続けて、批判はこの教材文に描かれた人物の感情に向けられる。橋は、この教材

文の感情描写の巧みさに對し、皮肉を込めて次のように言及する。

男女七歳にして席を同じうせずの教はあまりに古過ぎるが、若い男と女の子とが戯れて、女の子が「とうとう」たまらなくなつて「笑ひこけてしまふ」といった光景、美少女の嬌声が紙面に聞えて来るやうなこの描写が、文部省編纂の国定教科書として教室で講ぜられるのであるから、まったく新しくなったものだと思はざるを得ない。「源氏はわざと拭いたまねをして、ほら、すつかりしみ込んでしまつた。落ちないよ、と言つてまじめな顔をしてゐる」とある。遊戲の技巧に至つては、私の如き不粹者でも、かういふ読本で教育されたら、もう少し面白い浮世も渡れたらうにと残念にさへ思へるくらいである。

どう考えても小学生にはなまめかしすぎる内容。あまりに現代的かつ享樂的な表現。橋にとっては、この教材は不健全この上もないものであった。

◇橋の主張とそれに対する反論

教材本文を丁寧に分析して批判を加える橋の主張は、かなりの説得力がある。彼の国粹主義的な主張は別として、ここでの指摘は妥当なものともいえる。あれこれと苦心の訳ではあるが、恋愛感情めいたものが確かににじみ出てしまっている。これは、当時の編集方針からすれば、いささか選択を誤ったとも言えそうである。

この点を橋は、編纂者が、『源氏物語』を「我が国第一の小説」「世界的の文学」であることを強調し賛美しようとしたあまり、「単に不倫とだけでも言ひ足りぬ程度、まことに恐懼すべき構想を含んでゐる」点を見落としてしまったことにある、としている。事実そうであったなら、そこまでして『源氏物語』を小学校教材に採用しようとした編纂者の意図は何であったのか。当時の時局に対する一種の抵抗であった、という見解（井上起著・古田東朔編『国定教科書二十五年』武蔵野書院・昭和五九年）もあるが、このことに関しては、別稿で詳しく検討してみたいと考えている。

このような橋の「源氏物語」批判に對しては、いくつかの反論が提示された。また、あらわな反論という形はとらないが、この時期の国文学研究誌での『源氏物語』に関する言及に、橋の発言を意識したと思われるものが少なくない。これらの一連の反論についても詳細に調査した上でまとめてみたいと考えているが、橋の批判に比較して、教材文そのものについての詳細な分析を欠いたものが多いように思われる。

たとえば、平林治徳は「教材としての源氏物語」（『文学』昭和十三年十二月号）で、『源氏物語』に対する編纂者の深い理解がこの教材を出色の出来にしており、

「自国愛を喚起する重要な教材の一つとして、教授者は自信と敬意を失はず、これが取扱ひに深甚の注意を払ふべきだと考えて居る」と述べている。特に目新しい主張があるわけではなく、編纂趣意書の趣旨をなぞるような内容にとどまっている。「源氏物語に対する批難の声」については、「あまり礼讃者が多いのであまのじやくの気分なのか、どうも精読したとは思はれない人か又は何かの勘違ひがありはしまいかと思はれる」と、詳細を検討することなく一蹴している。

六、結びにかえて

◇その後の「源氏物語」と橋純一

小学校教材「源氏物語」は、その後どうなったのか。昭和十六年からは小学校は国民学校となり、教科書も国定第五期の『初等科国語』いわゆる「アサヒ読本」へと移行する。橋の削除要求とはうらはらに、ここでも「源氏物語」は生き続ける。ただしその内容には、修正が加えられ、「末摘花」から取材されていた部分は、「紅葉賀」からのものに改められている。そして、この教材は、終戦直後のいわゆる「墨塗り教科書」においても、修正箇所のないまま残され、国定第六期のいわゆる「みんないいこ読本」に至って姿を消すことになる。

橋純一は、先の「源氏物語」批判を掲載した『国語解釈』誌を、貴衆両院議員や文教関係者に発送して、「ごうごうたる賛否」を受けたという（関根俊雄「橋純一教授略年譜・主要著作目録」）。だが、同誌の一部の定期購読者を別にして、その主張は、支持者を得られぬままに無視されていた。おそらく橋の心中には忿懣と敗北感とが渦巻いていたであろう。『国語解釈』誌上での「源氏物語」についての言及も、十三年十一月を最後に、まとまった形ではなされなくなってしまった。

そののち、陸軍士官学校国漢科教官となった橋は、昭和十八年に『日本神話の研究』をまとめて出版しようとするが、発禁処分となる。その理由は、日本神話に関する見解に、当時公認されていたものとは異なる独自のものが含まれていたために、陸軍当局の忌憚に触れたからであった。幸か不幸か、このような処分を受けたことによって、戦後、彼は戦争責任を問われなかったという（関根氏の「前掲年譜」による）。文部省の官僚やその周辺の学者以上に国粹的・軍国主義的でありすぎたために、時流に乗ることができず、そのために追放を免れたとは、何とも皮肉な結末である。この後、昭和二十五年からは跡見学園短期大学に迎えられ、昭和二十九年に永眠している。

◇「源氏物語」批判の中の私憤

一連の、橋による「源氏物語」批判の根底にあるものは何か。それは、「非常時認識」に直結しない教科書を正そうとする「公憤」とでもいうものばかりではなかったように思われる。橋守部直系の国学者としての、主流派国学研究に対する「私憤」めいたもの——これが案外多くの部分を占めていたのではないだろうか。

江戸末期の国学者橋守部（天明元年（嘉永二年、一七八一）—一八四九）は、独学によって独自の見解を確立し、天保の四大家の一人に数えられている。父の遺言であった、「今松坂に本居宣長といふありて、其名は高けれど、ただ己が学びをたのみて、神典の解くべき矩を知らず。（中略）かかれは汝はかれらが学風にひとりなれて、もとの真を見出すべし。」という姿勢を生涯守り通した。

守部の学説の最大の特徴は、宣長が『古事記』『日本書紀』『源氏物語』等の価値を無前提に認めるという、古典に対する絶対視から出発しているのに対し、それらの文献に含まれている誤りを正して原義を明らかにしなければならない、という研究態度を取っているところにある。といっても、文献を客観的に検討して、成立事情や歴史的背景を明らかにしようとする科学的態度とは異なる。後人のさかしらによる付着物や改竄を払拭して、それらの古代日本精神の絶対的尊厳を明らかにしようとしたのであり、その究明に不可欠な条件を「神秘」として説いている。

そのような守部からすれば、『源氏物語』にしても、その価値を無批判に認めるわけにいかない。『稜威雄詠』で守部は次のように述べている。

此は深き心のある事にて、吾が朝廷には歴代さる疑ひはいささか有べきならねど、式部博くもろこしを見わたして、彼国こそさてもあれ、吾が皇統は天つ神の御胤なり。もし後々かやうなる混ひもあらば国家の一大事也とて、光源氏のみそか事に准へて風諫したるなりければ、是ぞ源氏一部の眼目なる。

守部にとつての『源氏物語』は、日本には存在してはならない世界を描いたものであった。

橋純一は、このような守部の学問の継承者としての位置に立たされていた。それは、橋道守の未亡人に懇願されて養子となり家督を継いだものであっただけに、なおさら強く意識されたであろう。『国語解釈』創刊号の巻頭に掲げられた、宣長へ帰れとの主張も、言ってみれば国学者としての常識的な姿勢を示したものであって、儀礼的な挨拶の域を出るものではなかったであろう。橋純一自身は、異端として退けられがちであった守部の再評価を求めて、果敢に「正統派」国学に挑んでいかねばならなかったのである。

◇「源氏物語」批判事件の本質

戦時下における「源氏物語」批判——このような言い回しからは、時局迎合型の文化人・学者の、滑稽なまでの軍国主義追従の姿勢を連想しがちである。たとえば、『国民科国語の指導 ヨミカタ一』（昭和十八年・岩波書店）には、国民学校一年生の教材「モモタロウ」の語釈として、次のようなものが列記されている。

「キジガ、トンデ イッテ、上カラ テキノ ヤウスヲ 見マシタ。」——戦闘開始に先だつて、まづ敵の様子を偵察するのである。今なら飛行機偵察といふところであらう。

「サルハ、スルスルト 門ヲ ノボッテ、中カラ 門ノ 戸ヲ アケマシタ。」——障碍物破壊班の活動である。桃太郎は、それを颯爽と指揮してゐる。

あまりの強引な付会に、笑い出してしまいそうな記述であるが、このような見解を堂々と、大まじめでその道の専門家が述べるという愚行が横行していた事実は、やはり笑って済ませることできないことであらう。

しかし、そういった多数の学者・文化人の歩んだ道と、橘の「源氏物語」批判とは、少々異質な面を持ち合わせてもいた。

私は、言うまでもなく、橘のような文学観・教育観は持っていない。だが、一つの教材を分析・評価するにあたり、その記述を具体的に押さえつつ、自らの見解を述べていく方法は、正攻法以外の何物でもない。少なくとも、児童生徒の発達段階や教育現場でのさまざまな影響関係を論じることなく、「世界第一級の小説」であるから小学校教科書に載せるべきだ、という乱暴な論理よりも、よほど説得力がある。その点だけを考えれば、橘の方に同情したくもなってしまう。

むしろ、今我々が問い直さねばならないのは、強引な理由を振り回して、『源氏物語』を小学校教科書にまで引っぱり出し、『源氏物語』を愛好すること、研究することが、立派に国策に役立つことを認めさせようと奔走していた側ではないのか。そして、そういった形で、戦前・戦中に社会的地位を得ていた学者・文化人が、戦後、橘の言動を批判しつつ、自分たちは軍部に非協力的であったとうそぶいているとしたら、どうだろうか。

戦前戦後を通して常に学問・教育の中枢に位置していた人々の無反省——それゆえに、戦後の古典文学教育は、いつまでも新たな出発点に立つことができないまま衰退しつつある、と結論づけては言い過ぎになるかもしれない。この事件のみで検証し得るテーマでないことは、十分承知している。それだけに、この問題意識をさらに敷延させつつ、今後も検証を積み重ねていきたいと考えている。